

## ひとりひとりの青少年の心を たいせつにする職業訓練

### I. A 総訓訪問の印象について

A 総訓は昭和 21 年に「県家具建具工補導所」という名称で、木工という特別の知識、技能を要する職業に就こうとするものに対する技能訓練を施し、職業の安定をはかるうとして創立している。

その後、「自動車修理工補導所」が加わり、現在の「A 総訓」になっている。25 年という比較的長い歴史をもっている。

ここでも、全国的な傾向とたがわず、高校進学率の上昇にともなって応募者は年々減少し、募集に苦労している。

25 年の歴史のためもあり、実習場は古いし、校庭も決して広いとはいえない。しかし、暗いイメージは全くなく、訓練生一人一人から受ける印象は明るかった。

青年独特の型にはまらない自由な雰囲気、形式にとらわれない挨拶に訓練生の人格の形成における明るい光をみるような気がした。

このような明るい青年の姿を総訓にみるのは私にとってはめずらしいことである。

何が訓練生を明るくしているか知りたと思った。

#### 1. 土曜の午後の実習場

午後 1 時過ぎであったと思う。

調査時間のあいまをみて、いくつかの実習場をのぞいてみた。その日は土曜であり、おおかたの訓練生は帰宅して実習場はシンとしている。応用実習でできあがった製品を受けとりにきた会社の人と話している指導員に黙礼して、機械実習場を通りすぎた。

そして、木工実習場に入ってみた。

そこに、2 人の訓練生をみつけた。

しばらく、立どまって遠くから、何をしているかながめていた。

真剣になってカンナをかけている。

仕事の邪魔をしてはいけないと思ったけれども、2人の隣に座りこんでみた。

“訓練校の毎日は楽しいですか”

“……………”、なんの返事も無い。

“今、削っているのは何ですか”と問う。

“基本実習の課題で、とくに製品というわけではないです”とはじめて口を開いてくれた。

かれらは寮生で一週間ぶりに父母のもとに帰る日なのだそうである。

汽車の時間がすこしあるので、その間に自分の作業課題の残りをやっていたのである。

少しの時間をおしんで、何かを求めているかれらに、現状の職業訓練は十分に答えているのだろうか、また将来の職業生活で、本当に職業訓練校に学んでよかったと思ってくれるだろうかと不安を感じた。

## 2. 教育の心をもった校長さん

この校長さんは地方行政のベテランであり、地域の青少年教育をはば広くみている。

労働行政にとじこもった職業訓練ではなく、地域の教育機関との総合的な体系の中に総訓を位置づけるべくあらゆる努力をされている先生である。

氏の44年訓練生入所式の式辞のメモに、「……訓練は教育の方法であり、極めて効率の高い教育方法であると思う、訓練所が学校と違うところは何かといいますと、学校では学科が主であり、訓練所では実習が主となるのであります。」と述べ、さらに「頭と腕の技能者というとき、先づ、人間として優れた人格を持たねばならない。」と強調している。

そして、図書館と体育施設もない現状の職業訓練施設のままで青少年の育成ができるのかと結んでいる。

この校長さんとの話の中で、いくつかの点をメモしてみよう。

(その一) 校長職の任用の問題である。

訓練生への直接の影響は実技、学科を担当する指導員である、しかし、

この総訓の訓練生をみると校長の職業訓練への考え方から影響が訓練生にかなり大きいことがわかった。

そこで思うことは、教育や職業訓練をしらない人が職業訓練機関の長として立ってよいのだろうかということである。全国的にみてあまりにも校長の資格がバラバラすぎて、トップ・マネジメントの体系がとれていないと思われる。このような現状では、総訓が一つの組織として機能していないことの一つの原因であると思つた。

(その二) 職業訓練大学校出身の指導員に対する批判である。

つまり、「訓大卒の先生方の職員会議での発言の仕方は誠におそまつである。また、訓練生に接する方法をあまりにもしらなすぎる。訓大では教育者としての教育として、どんなことをやっているのですか、カリキュラムはどのように組まれているのですか」と問われた。

この質問の中に、職業訓練のための教師養成を再考する必要を痛切に感じたのである。

(その三) 指導員の再研修の問題である。

指導員があまりにも、現状の仕事におわれて、新しいことを勉強しなおす時間がない。

また、費用がないことをどのように改善すべきかという問題である。

職業訓練が本当に産業の発展についていける人間を育てる気があるならば、新しい職業的な情報を常に導入するのは当然であろう。

それにもかかわらず、研究会や研修会への参加の計画や予算化がなされていない。

このようなことでは職業訓練の存続は不可能ではあるまいかとも思った。この校長さんからは、深い感銘をうけた。

雨にけむる森をながめながら、多くをかたらずして教えるこの人の姿と職業訓練をうけた人々の将来の姿とをくらべながら、明るい気持で次の地に旅立った。

### 3. 中学校からみての総訓の印象

総訓から遠くない市内の中学校を訪問し、総訓の印象を聞かせてもらっ

た。

この中学校は総訓との連絡がよくとれており、職業訓練に対して好意的であった。

中学校の先生の話によると、中学校の生徒は訓練校に対して、“こわいぞ”というイメージを持っているそうである。つまり、しつけがきびしくて不良対策が徹底しているところと理解されているらしい。技能とか知識とか、学ぶ内容はほとんど無関係なイメージがもたれている。この現象は教育の歴史的流れとして、どのように解釈すればよいのかと思った。

また、私立高校との関連において、総訓について次のように語ってくれた。

“従来、私立高校は普通科がほとんどであった。ところが、後期中等教育の多様化路線の影響で、電子、建築など工業科が多くなっている。これは、父兄の要請というよりも、企業の要請にあわせて、私立高校を経営したほうが、私立高校が現状の社会に存続しうるという理由だけからであろう。”と言う

その結果、父兄も生徒も職業課程を選ぶとしたら、総訓がよいか、私立高校がよいか、迷っている。そして、最後には教育内容はともかく、資格のもらえる私立高校にしておけば……というところに落ち着くらしい。

ゆえに、私立高校には総訓へ入っている者より、はるかに成績のかんばしくない者もいる現状をうなづくことができるのである。

## II. B総訓訪問の印象について

過去2年間の総訓生素質調査で、B総訓は調査した総訓の中で、知能程度が2年間続けて最も高かった。

訪問調査の目的の一つは、この素質の高い者の集まる現象をつきとめることである。

調査前の予測としては、

- (I) 高校進学率が低いのではないか
- (II) 入試の方法が良いのではないか
- (III) 地域産業とうまく結びついているのではないか

(IV) 中学校進路指導に特徴があるのではないか

などいろいろに推測してみた。

しかし、調査結果ではこのいずれの予測もあたっていなかった。

明確には表現できないが、最も大きな理由は、この総訓のある地域に専修訓練校がないことおよび市内に私立高校が1校しかないことのようにある。

というのは、同県にあるF総訓の地域には専修訓練校があり、中卒者のうばいあいのような形式となって、募集が非常に苦しいということからも裏づけることができよう。

B総訓の知能程度も昭和45年調査では低下してきている。

数年前に他県でおきている現象がB総訓にはおくれてあらわれているとみれるだろう。

B総訓のこれからの職業訓練に対する方策のとり方がどのように進められるか注目したいものである。他県の総訓と違った新しい方策を考えてほしいと思った。

1. ある課長さんの職業訓練の見方

課長さんは長いことB総訓におられ、実力のある人と聞いていた。

訓練生募集について、課長さんは次のように話してくれた。

「今年から、入校試験には学科、面接に加えて心理テストを採用しようとする積極的な姿勢が指導員の間に見られます。ぜひ、中学校から高校に入る時のような成績だけの試験をやめたいのです。」  
と言われる。

また、「昭和44年の応募状況は中卒者が180名でした。定員が130名ですから50名を落しています。本年度は業界の強い要望もあって、成績のこのましくない者でも150名まで入校させることに決めました。

というのは定員増をしないと予算が確保できないので、職員の研修予算もでないのでやむおえないのです。」

どこの総訓でも問題になっていることであり、なんとか各総訓内

で解決したいという気持はよくわかる。しかし、入校選考における基本的な姿勢が指導員研修の費用を生み出すためにゆがめられるのはどうであろうか。

学業成績のみで人間をとらえるのはやめて、人格のあらゆる面をみて、職業訓練でのばしうる特徴をつかまえる一方法と心理テストを採用している指導員の考え方とあまりにもかけはなれているような気がした。

不況のきざしがみられるこの県の業界からの要望とはいえ、職業訓練をうける青少年の立場を忘れてほしくないものである。

## 2. やっとはじまった高卒の募集

B総訓では今までほとんど高卒者を採用していなかった。高卒者が入ったとしても、44年までは転職訓練グループに入れている。

45年度からはじめて高卒者の募集をはじめて4名を入校させ、中卒者と混在訓練している。時期をおそくして開始されているにもかかわらず、他の地域となんらかわらない方式しかとられていない。

また、職員間には高卒者の受入れに対する抵抗もある。つまり、学歴からくる指導員のコンプレックスがもとで高卒訓練の実施にブレーキがかけられている。

この現象をみると、将来、期待さるべき職業訓練の客体である高卒者は指導員の能力によって制限される、指導員の力にあった高卒者のみが入校を認められる結果になるであろう。

職業訓練指導員の根本的再研修が早期に実施されないと、たとえ高卒者が職業訓練を受けることを欲したとしても現実には職業訓練校に入れなくなる可能性もあると思った。

## 3. B地域の中学校教師からみた職業訓練

中学校教師は「はっきり言って、職業訓練校を後期中等教育機関として期待してはいない」という。

「工業高校では「中堅技術者」を目標にするといえます。総訓の場合、中学校のみで就職させるのは心配なので、なんらかの基礎をつけてやりたいのです」

総訓については“なんらか”というあいまい目標が期待されている。

あえて解釈すれば、青年前期を一定の集団にあつめておいて、年令的な発達（成熟）をもって職場につけた方がよいといえよう。

15才での職業準備教育の開始が職業的成熟との関連において、妥当であるかどうかにも関係し、重要な視点と思われる。

中学校の先生はおもたい口をあけて続けるには、“現在ならびに将来工業高校ではおこなえない職種を実施してほしいです。昔は工業高校では電子、建築などの実技はおそまつでした。限在の工業高校出身者の職場でのうわさをきくと、職場ですぐにはまにあわないが、数年して新らしい工夫もできるよくなる」と聞きます。それに比べ、総訓出身者はすぐに職場に入れるが、数年で工業高卒においこされる。してみると、基礎的能力の開発にもっと重点をおくべきではないでしょうか。特徴をだしうるとすれば、現状の中学校から総訓へいく生徒を中心に考えてみると、言語メディアでは基礎的能力がつきにくい者が多いように思います。ゆえに、視聴覚メディアを十分に活用して、独特の教育方法をもちいて、職業訓練をされると中学校でも総訓へ安心して生徒をおくりこめます”ともいわれる。

たしかに、職業訓練のねらっている目標は人間中心に考えてみるとあいまいである。

だいたい、技能、技能者などの内容は形成される能力が固定的でなく、時間的に変動する要件であり、とらえにくいものである。しかし、逆にいえば、時間的な変動を十分に考察するカリキュラムも考えうる独特の教育訓練体系ができる可能性も持っているのではあるまいか。

### III おわりに

総高訓にはじめから入校したいというものは皆無である。本当は工業高校に進みたかったが総訓にしか入れなかったのである。

15才時点の進路選択が現状のままでよいとは思えない。教育制度の問題、さらに国民の教育に対する欲求の根底を再考察しないと、青少年に対する教育は青少年個人にとって、マイナスの要因を付加することにもなりかねないと思った。』